百富士
江府
49.
269

敘

芙蓉之岳高峻勝際甲於天下絶頂擣天盛夏封雪故古今画家無不寫之以供展翫者其間名於世者亦不爲鮮矣或圖春景或寫秋景浸其

山而望者從某野而觀者帯
月雲者帯風雨者帯朝露者
帯暮靄者無不具體而生者
唯是蓋蒼之挂急天也各地
異観四時殊景朝暉夕陰烟
雲出沒容態変遷奇觀莫窮

故画家亦致意于此去年友人
君錫風流雅致凡技兼善画
居其一焉壮好遠游足跡半
天下以故每観莫窮急景於
多変即就揮毫焉漸次累功
殆盈百數比之諸家豈惟每

體有美趣所謂諸家未嘗圖
及者亦如取諸畫底善尺錫
所爲專在於師造化而已今也
悉命之剞劂氏并取古今所
寫其殊絶而當意者摹擬以
雜其間因請當世作者各就

其圖而題詠之嗚呼俾覽者
不出戶遊烟霞山色彷彿在
於几席間無濟勝之具而有
登臨之樂豈不愉快乎甚或
欲圖寫某處勝景者取途於
此亦何難爲之有是爲序

丁亥秋日

柳洲田謙之題

高くたふとき富士乃袮八

御国の大和乃魂人ごとや

よしてふれその気象は海の

吉い武尽す芝山巌志ゞく

峯ないを波あらし吹く

東都乃隠士河村君青に
遊む画よりあそひもとより風雅の
人にて凡ハ武蔵野に尽せる
始として四方乃名所ハいり杖をひき
高汐見坂より馬をとめ凡十ヶ所山の
風景を写す画よ嶋のしらむ

かくて甲斐路鰍沢嘉やり富士にいたら
むと我も釜山のこれをしれ
また宿の遠く見えなれど晴天の
七十二芙蓉を数へいはんしの
そのたびにみる事也僕と人と
意細小してそれむところそ

又似るに李候か高名乃序を
あへ高肆せん

芙蓉峯隠士藤松堂書

百富士乃序

和歌に詠し絵に写し世にあまねき名所多し
中にも夏をしらぬ書咲にかゝやき人の國に冴く覚して
名ある八富士乃すかた称にそへてかはりは多く是描須見用ゆるに
むさし此より入郷合せるやと画にも文さるゝはかあり古物写
絵かけるよ代はさまゝとも世採画家の学しまゝかり
左秋乃望不くの術を尋ちめいちまゝ摘し名れと

後の画工かりくてはおこそくさりてまての地いはれく化家かくこ
やまとにも流しあくみえ此家し画したる物ことと性是
その家の法則のまゝにやわらかに画をまなびて
ありて性質猿もしよろしからずのにしてゐぬ名称なるよも
かならず八ちう京の物なるとふさるて文志の音なる
ゝ收る於法まて乃らむものにかりこ事て路二箇乃
主人なるやくそうり山水をかきなすを好みてかゝみらの

ほくこうちやうしに猿夜をて後ゆきしりてもこひ宮のあはれさ
よりあまり法ち画寂のわらく此まなひ兒見よろしく叶ひ紀
けたるひとをは自然てまちつ下後にもそれ保る事後猿りぬけし
より画をむかしとしてそのまし人ゆもはに山はあなからしと
筆の物をて世にしてそのむむしとやかにいくさり花し思ひ見ん
しかよく但て長京にてれし世乃さらりゆく花乃ふりにつきと
く画をもしよ風のわもしとなかめて妙へしけ坊人のそこくめふ

百富士

ちり梓にちりはしと南さまも八比一帙となしてあくろふことは
門人あまたの山川乃景色をゑがかしめ時しかなれば
して月花乃風情とものをとるところをもひき許さ画く
成るまゝ八百富士と名付かり義世に消せぬ景れ白
ゆき附てぬるそあらひしかぎりなきのみなし
明和四丁亥 年後乃ち月望日 蓊湖 の 狩俗体 香以書く
筆をとりぬ

ゆふ
いまに
あらゝ尾花や
秋の富士

雀村主
素齊

日本橋
橋涼し
富士うしろなる
緑の奥
花径

駿河町

富士涼し
裾せ小渡く
風城下
朱雁

御茶水
富士からの
ゆき解しまるり
御茶の水
如岡
聖堂

駿河臺
富士の根や
兎来

永代橋
冨士の原日御も形し橋の上
橘下

新大橋

橋杭の間てしふ富士や涼し舟

泉之

両國橋

三國を續く山見て橋涼し

百壺

石川島
春晴れて
不二を横ぎる
さつま船
鷺洲

三園山
春江

玉嶌山
涼しさや
寒月

日本堤
蘭室
喜夢亭
眠中

隅田川

富士の根の雪ふ
こほるらにかゝる
やうく関やの
さしにみてゆん

默守菴
宗朝

木母寺

綾瀬らし
手あかりめ
りのや
富士の峯
千里

綾瀬橋

飛鳥山

花の香和るも流し富士おろし

義松

撞木橋

橋くゝし
富士ふ入るのる
あらしう旅

柳至

羅漢禅林
富士へ向く
手すりや高し
羅漢堂
大来

小松川 葛西
冨士ありし
小松川

松間

秀出玉芙蓉不厭隔松樹
緑葉與山光相映自成趣

駿東　塩崎春稿

橋下
富士見つゝ歩や橋の下凉　花口

麦の穂よ
掃せて流し
ふ二の取

上毛沼田
虛實菴
春路

笠
風ハやしの笠きる日とし富士詣
推巳番
栽松

烏白く明けり
里や富士おろし

武山
耕雲舍
老村

雪後

きこてられ
その名も
あらはれ
ふしの松の
雪のうへ千
見出原
あらし吉

廣定

晩景
夕立の入日や富士をこぼれ出し
相陽 昔庵
越州 古缶

風

風の世家のふか
富士の嵐

寧波摟
浙江

窗中
再蝶